

平成15年6月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 0428-23-6859)

火打ち石の産地

マッチは長い間、身近な発火道具として利用されていましたが、最近では、利用される機会も少なくなってきました。ライターやボタンを押せば点火する電子機器など、手ごろで安全な道具が増えています。

マッチは1827年イギリスで発明され、日本には幕末に伝わってきました。当時の日本人たちは、欧米人たちが小さな棒の先を擦って発火するのを見て、魔法と考え、驚いたことでしょう。わが国でマッチが製造されるようになったのは明治11年(1878)からで、新燧社が黄燐マッチを製造しましたが、それまでは発火装置のすべては「火打ち石」でした。

明治10年(1877)12月から半年間、上野公園を会場として内国勸業博覧会が開催されました。色々な品物が国内各地から出展され、それらは『内国勸業博覧会出品解説』と称する冊子にまとめられていますが、「火打ち石」は全国42か所から出展されました。当時、神奈川県に所属していた多摩地方は、黒沢村、日野村、そして二俣尾村から出展されました。

多摩川北岸の二俣尾から沢井にかけては、川井層と高水山層と称する地層が分布し、山地を形成しています。いずれも今から1億5000万年以上も前に、海底に砂や泥などが堆積した地層で、所々に石鱈(せっけん)に似たチャートと称する地層が、数~数十メートルの幅で挟まっています。他の岩石と比べると著しく硬く、石同士や石と鉄塊を強くぶつけると、火花を發します。そのため、チャートは火打ち石として長い間、人々に利用されてきました。

二俣尾のチャート(火打ち石)の産地は、軍畑駅から平溝を経て高水山へ向かう

登山道の、東側山稜に位置しています。全長約20メートル、幅約12メートル、比高約20メートルの巨岩は、硯石と墨石から成り、火打ち石の巨大な塊です。塊の表面には岩片を剥ぎ取った跡が残っていて、周辺には質があまりよくない岩片が散乱しています。いつ頃から産出されるようになったのかは不明ですが、ここから産出された「火打ち石」は、江戸市中の台所などで広く利用されたことでしょう。

(文責 角田 清美)